

ヘレニズム村落の構造を探る

—エジプト・イドウク湖沿岸コーム・アル＝ディバーウ遺跡の考古学調査 (2025)—

長谷川奏 早稲田大学・東日本国際大学客員教授
 津村眞輝子 古代オリエント博物館館長
 西坂朗子 東日本国際大学客員教授
 小岩正樹 早稲田大学建築史学科准教授
 川津彩可 明治大学建築学科助教
 岡崎伸哉 ナイル・紅海・地中海文明史研究会会員
 ハーリド・ファッラハート エジプト考古最高会議ブハイラ局長

Searching for the Structure of the Hellenistic Village Site: Archaeological Excavations at Kom al-Diba¹, Waterfront of Lake Idku, Egypt (2025)

HASEGAWA, So Visiting Professor, Waseda University and Higashi Nippon International University
 TSUMURA, Makiko Director, Ancient Orient Museum
 NISHISAKA, Akiko Visiting Professor, Higashi Nippon International University
 KOIWA, Masaki Ass. Professor, Waseda University
 KAWAZU, Ayaka Assistant Research, Meiji University
 OKAZAKI, Shinya Member, Seminar for the History of Civilizations at the Nile-Red/ Med. Seas
 Khalid Farrahat Director, Buhaira Inspectrate, SCA

1. 西方デルタ地域の研究史

エジプト西方デルタ調査隊は、現在、エジプト西方デルタの潟湖(イドウク湖)のほとりでヘレニズム時代の村落調査を進めている(図1-1)。この地域は、第26王朝が建設したギリシア人の交易都市ナウクラティスと、地中海沿岸の海運を一手に担ったカノプスを結ぶナイル支流が走っていた場にも近く、同王朝の強い影響下にあったと推測される。アレクサンドリアが建設されてからは、当該地は後背地のウォーターフロントで広くマリユート湖まで繋がり(Blue 2010)、メンフィスに向う交通上の要所の一つであったと思われる。その一方で、ラシード支流が齎す氾濫が広く分布する地域であり、古典考古学ではその生産性の低さから重要性が見過ごされてきた地域であるが¹、近年では各国隊の調査が進み、アレクサンドリアの後背地全体の意義が見直されつつある(Kenawi 2014)。

2. 研究対象地域の自然環境

エジプトの地中海沿岸では、沖積世に入って以後の温暖化による海進が覆ったため、土中には塩基性土壌

が残されて、集約的な麦作が困難な場となった(Tousson 1934)。当該地の地理的な特徴を見ると、南北軸では海洋～砂丘～潟湖～緑地と続く偏差の大きな環境の場が活動の舞台となり、一方、平坦な平野が続く東西軸の地勢は生活文化の型が一様に拡散する場となったと思われる。したがって、これらの地域ではナイル沿岸とは異なり、塩分に強い作物栽培(ゴマ、ウリ等)、漁業(海水域ではボラ、サヨリ、淡水域ではナイルパーチ、コイ、ナマズ等)や野鳥の捕獲(ウズラ、サギ等)、葦織り等の製造業等、脆弱な生業を取り結んだ複合経済が営まれていたと推測される。この地域に特徴的なのは海岸砂丘と内陸砂丘の形成であり、砂丘の頂部に形成された居住域が上記のような経済活動の拠点となったと思われる²。研究対象のコーム・アル＝ディバーウ遺跡もそうした環境の中にあっと思われるが、砂丘に取り巻かれた環境の多くが近代の開発で失われた(恵多谷等 2013)。コーム・アル＝ディバーウ遺跡は2003年に英国隊が研究対象遺跡のごく簡単な地表面観察を行った経緯があるが、基本的には本格的な調査が行われていない未調査の遺跡と位置づけられる³。

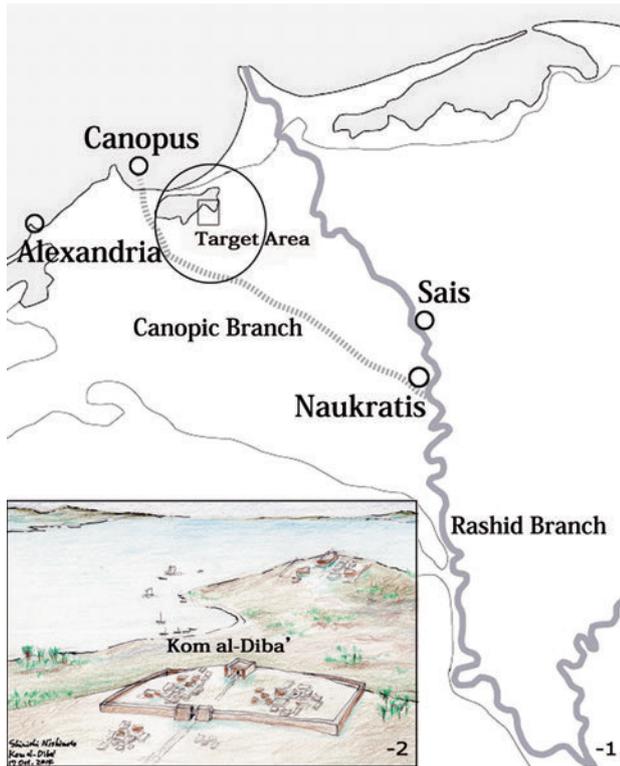


図1：(-1)研究対象地域の位置、(-2)コム・アル＝ディパーウ遺跡復元図

3. 遺跡における分布調査の成果

コム・アル＝ディパーウ遺跡は南北二つの丘からなり、集落遺跡と思われる南丘陵は6 haを測り、丘の頂部は麓から10 mほどの標高差を測る。私たちの研究班は、2013年以降、この遺跡の概査を開始した。まず微地形測量の後、磁気探査(GRAD601を使用)を行ったところ、南丘陵の頂部には、ヘレニズム時代に建造されたと推測される祭祀施設ナオス(Naos)を中心とした神殿周域住居(Temple Precinct)が形成されていると思われた(岸田ほか 2015)。探査画像は、日乾煉瓦住居が密集した集落を補足していると思われ、さらに家屋、竈等の施設、家畜小屋、倉庫、広場、街路等が含まれていると考えられる。集落は丘の南～西側に集中しており、概ね東西方向よりやや傾く規則的な軸線を有す。さらに丘陵の北部には、神殿状の大規模遺構も反応に表れているようである。ナオスの横幅は約660 cm、壁厚は76 cmで、煉瓦規格は長さ38 cm×幅20 cmである。ナオスは横長の部屋を南面させた一室構成であり、入口の位置は中心から若干東側にずれている。壁体の厚さも煉瓦2枚分で、小規模の建物としては重厚な作りである。また丘の中腹からは、煉瓦規格は長さ36 cm×幅19 cmの煉瓦4枚分の堂々とした厚みを持つ壁(144 cm)が発見され、丘の頂部のナオス

を取り囲む周壁をなすと考えられた。建造の年代は不明であるが、煉瓦規格が示唆する年代軸の可能性の一つとして、プトレマイオス王朝時代を視野に入れている(西本・長谷川 2015)。一方、地表面に分布する遺物(ローマンランプ、東方シギラータ土器、アンフォリコス等)の年代からは、集落の最も活発な活動時期は、ローマ時代(後1～3世紀)にあると推測された(Hasegawa and Nishimoto 2022)。またこれらの成果を取り入れて、遺跡景観の復元図も作成された(図1-2)。

このように、対象遺跡の構造のおおよそが探査によって把握されたことから、丘陵頂部のナオスの周囲の構造を解明することを目標として、2023年から発掘調査が開始された。2年間の発掘調査を終えたところでは、ナオスの東側の建物配置は当初考えられていたよりも複雑で、軸線の微妙な異なりは、建造年代の異なりと推測された。ナオスの周壁の基礎近くからプトレマイオス2世のコインが得られたことと、帝政のローマ時代(紀元前1世紀～紀元後1世紀)を象徴する土器片が取り上げられており、当該遺跡の形成年代と最も代表的な活動時期に関する手掛かりと思われた(長谷川ほか 2025)。

4. 発掘調査(2025)の成果

2025年の発掘調査では、南の丘(図4-1)において、D3b3、8、13、16～18、21～25の9グリッドと前シーズン区域の再クリーニングを含めた調査が行われた(図2)。表層下から検出される遺構の上部構造は既に失われており、日乾煉瓦壁の最下部だけが復元の手掛かりとなる。

【出土遺構】

① 主な出土遺構(図3)

P1：幅がおよそ8～15 cmの溝状遺構が丘の南域を中心に確認された。これらの遺構は煉瓦づくりのように思えるが、煉瓦目地は明確ではない。また複数の線列において、線と線との幅は最も狭い箇所約30 cmであり、これは煉瓦の長手方向の数値にあたる(図4-2)。これら溝状遺構のうち、D3b23からはブロンズ釘等が見つまっている(図5-1、2)。

P2：丘の北側では、建物の壁に沿って投棄されたとされる土器片の集中がみられた。壁の上部が失われているため、壁の位置を特定する重要な手がかりとなる(図6-1)。

P3：ナオス3部屋のうちの最南端の部屋の北壁中央に、斜めに配置された日乾煉瓦がみられた。この部分は壁内部ではなく、床面と考えられる。斜めに配置された煉瓦は2枚のみであり、開口部の床面上にこれ

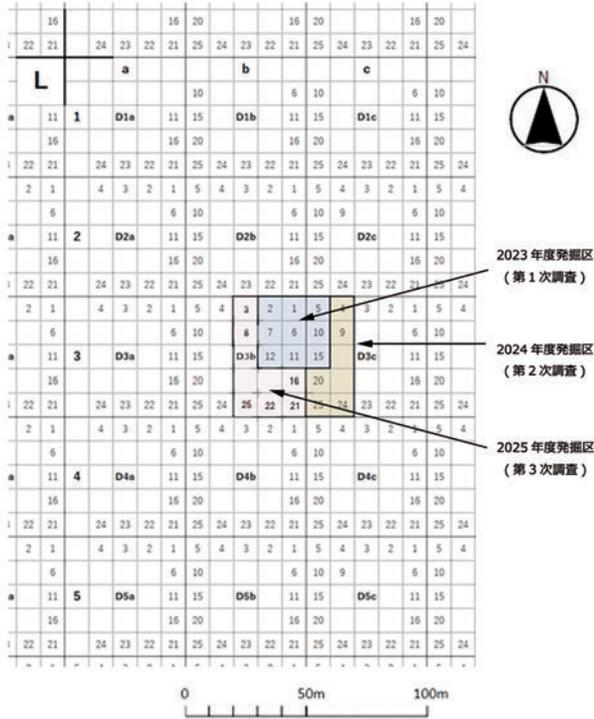


図2：グリッド設定図



図4：(-1) コーム・アル=ディバーウ遺跡南の丘、(-2) 溝状遺構(P1)

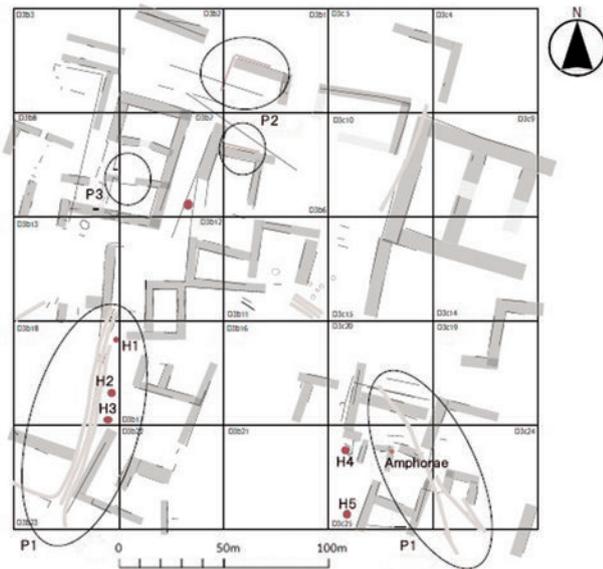


図3：出土遺構分布図

が配置されていたと思われる(図6-2)。

② 炉の分布

D3b18 東側には、溝状の遺構の南側に3つの炉が並ぶ。いずれも周囲に暗灰色の日乾煉瓦を敷き詰めているようである。

H1：西側では貯蔵壺状の土器が用いられている。東側では焼成煉瓦が中心で、ところどころに日乾煉瓦も見られている。

H2：表面には長さ16cm×幅9cmの完全なレンガ

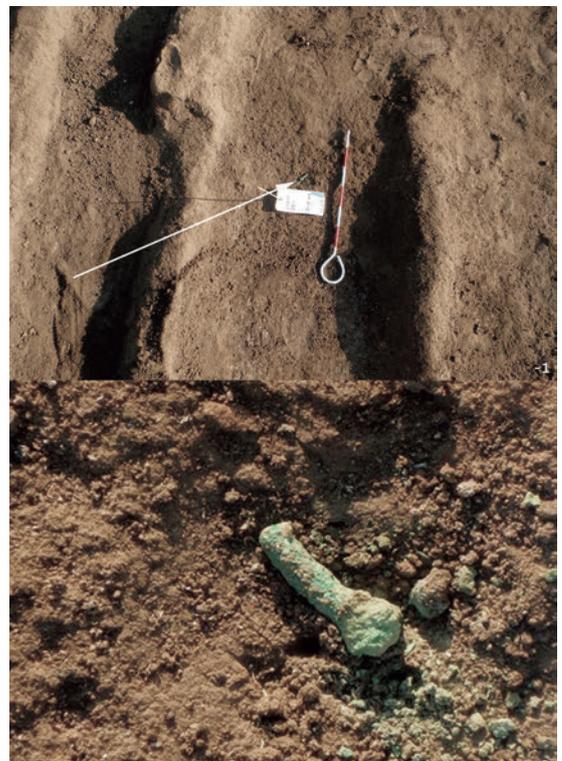


図5：(-1) D3b23の溝状遺構、(-2) 出土したブロンズ釘

が1つみられている。

H3：焼成レンガが最も鮮明に見えており、そのうち1つは幅9cmの規格であった。表面に見えている



図6：(-1)壁に沿って投棄された土器集中(P2)、(-2)斜めに積まれた煉瓦(P3)

レンガの幅は16 cm まで様々な規格が用いられているようである。焼成煉瓦のすぐ上には、アンフォラ把手と、それらと関連のある破片(特徴的な白いスリッブをもつもの)が分布する(図7-1)。

H4、5：このうちH5では、外側は日乾煉瓦(灰色土を多く含むもの)を長方形に、内側には日乾煉瓦を円形に積み、その内側に焼成煉瓦を貼ったものと思われる。長方形部分の内寸は約80 cm×90 cm、焼成煉瓦を載せた部分の内径は約70 cm である(図7-2)。

③ D3c25 ダッカ(床面)

グリッドの北東側には、幾重にも重なった壁が見られる。最上層の壁は、黄褐色の砂を多く含んだ小型の日乾煉瓦で作られており、壁の軸は南北軸に対して約45度の角度をなしている。さらに、グリッドの南側には、白と灰色が交互に並ぶ厚い壁が東西に走る特徴的な遺構がみられた。焼成煉瓦片が点在することから、ここには焼成煉瓦を用いたダッカ面があったと推測される。H4の西側では、長さ23 cm×幅23 cm×高さ4.5 cmの完全な正方形のレンガが発見された(図8-1)。ダッカ面には、土器・木炭・小型青銅貨・骨・貝殻等が含まれ、白漆喰、塩、灰が密に分布する。

当該グリッドでは、ほぼ完全に復元されると思われ



図7：(-1)炉(H3)の出土状況、(-2)炉(H5)の出土状況

るアンフォラの破片が集中して発見された。これらは日干しレンガの直上やダッカの直上ではなく、日干しレンガの内側(床または壁の内側のどちらかは不明)に埋め込まれたようである。これは供物として意図的に埋設されたとも考えられる(図8-2)。

南西側には土器の首の半分を削り取ったと思われる吹き口があり(図9-1)、鋳滓の一部も採取されていることから、この炉跡は青銅などの金属を铸造するための炉であった可能性がある。これら2の炉は、いずれも斜面下向きの吹き口となっている(図9-2)。エジプトにおける铸造の事例として、ここでは新王国時代のレクミラの墳墓の事例を掲げる(図9-3)。

【出土遺物】

① 土器

1. ダッカ出土の土器群

ダッカ出土の土器群は、食卓器、調理器、貯蔵器から構成されている。主な粘土はシルトとマールである。大型壺の中には、胴部に櫛目文をもつもの(図10-1/1)、大型な把手をもつもの(図10-1/2)、口縁と胴部上位に注口を持つもの(図10-1/3)などが見られた。注目すべき土器片注目すべき土器片としては、長首の黒色研磨の瓶(図10-2/1)と、鮮やかな赤色の光沢を



図8：(-1) 方形の焼成煉瓦(D3c25)、(-2) アンフォラ片の集中出土(D3c25)

持つシギラータ土器(おそらく東方シギラータ)(図10-2/2)などがある。

② 土器以外の出土遺物

1. ガラス器(図10-2/3)

透明なガラス器の口縁である。

2. ランプ(図10-2/4、5)

完形で小型の土製ランプであり、トーチと共に使用されていたと推定される(シルト陶土、長さ45 mm、幅28 mm、高さ15 mm)。もう1つの完形のランプは、プトレマイオス朝時代のものと思われる(シルト陶土、長さ75 mm、幅58 mm、高さ28 mm)。

3. 護符(図10-2/6)

この像はバスを表したファイアンス製の護符である。頭飾りと腕が失われ、白い胴体が露出している。もともとは青い釉薬で覆われていたのが劣化したと思われる(長さ16 mm、幅10 mm、高さ4 mm)。

4. ビーズ(図10-2/7)

紐穴を持つ青い石のビーズで、径は10 mmである(トルコ石か)。

5. ゲーム駒(図10-2/8)

これは、クリーム色のスリッパが掛けられた素焼きのゲーム駒である。形状はほぼ円形で、側面は滑らか

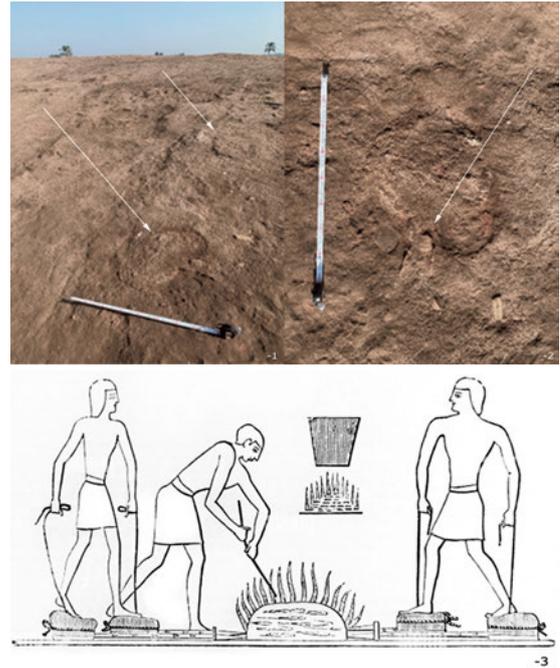


図9：(-1) H4、H5の位置関係、(-2) H5とふいご部分、(-3) レクミラの壁画にみる金属鋳造 (Davies, N. 1943: *The Tomb of Rekh-mi-Rē at Thebes, Metropolitan Museum of Art, New York, vol. 2, p. 1.*)

に削りを施されている。径は28 mmである。

6. 金属製の釘(図10-2/9、10)

鉄製の釘(図10-2/9)は、長さ36 mm+、径(頭部)17 mm、径(胴部)10 mmである。青銅製の釘(図10-2/10)は、長さ27 mm+、径(頭部)10 mm、径(胴部)5 mmである。

7. 青銅製のヘアピン装飾(図10-2/11)

これは、葉飾りの付いた青銅製のかんざしの一部と思われる。長さ42 mm+。

5. おわりに

ナオス周辺の丘陵地帯の発掘を完了し、建物群が明らかになったものの、その分布は依然として複雑である。ナオスの東側だけでなく、南方にも建物群が広がっているように見える。また、斜面には2つの溝状の遺構が見られた、炉跡も散在しており、この斜面が作業場として利用されていたとも思われる。2023年の発掘調査で示されたように、建物の軸線の違いは年代の順序を示唆している可能性があり、今後の調査でその年代を解明していきたい。出土遺物(主に陶器、ランプ、コイン)のアセンブリッジは、プトレマイオス朝時代から初期ローマ時代にかけてのタイムラインを示唆している可能性がある。



図 10：(-1)大型壺(no.1-3)、(-2)特徴的な土器片と土器以外の出土遺物(no.1-11)

■参考文献

・ 恵多谷雅弘・中野良志・下田陽久・長谷川奏・エルサイード アッバスザグルール 2013「多衛星データを用いた古代エジプト遺跡 Site No.52の発見について」『写真測量とリモートセンシング』日本写真測量学会、52巻4号 200-206頁。
 ・ 岸田徹・長谷川奏・津村宏臣・竹内俊貴・茂木孝太郎 2015「磁

気探査と地中レーダー探査によるエジプト・アラブ共和国コムアルディバー遺跡の調査研究」文化財科学会第32回大会、東京学芸大学、2015/7/11~12(ポスターセッション)。
 ・ 西本真一・長谷川奏 2015「エジプト西方デルタ、コム・アル＝ディバーウの建造物(1)」『日本建築学会梗概集日本建築学会』日本建築学会 7-8頁。
 ・ 長谷川奏・西本真一・小岩正樹・川津彩可・岡崎伸哉・西坂朗子 2025「ヘレニズム村落の構造を探る—エジプト・イドゥク湖沿岸コム・アル＝ディバーウ遺跡の考古学調査(2024)—」『第33回西アジア発掘調査報告会報告集』94-99頁 日本西アジア考古学会。
 ・ Blue, L.K. (ed.) 2010 *Lake Mareotis, Reconstructing the Past: Proceedings of the International Conference on the Archaeology of the Mareotic Region held at Alexandria University, Egypt 5th-6th April 2008*. Southampton, BAR Publishing.
 ・ Kenawi, M. 2014 *Alexandria's Hinterland*, Oxford, Archaeopress.
 ・ Hasegawa, S. and S. Nishimoto 2022 Recovering the landscape of the waterfront at Lake Idku: Archaeological survey at Kom el-Diba'. In A. Wahby and P. Wilson (eds.), *The Delta Survey Workshop: Proceedings from Conferences held in Alexandria (2017) and Mansoura (2019)*, 55-64. Oxford, Archaeopress.
 ・ Mahmoud-Bey 1872 *Mémoire sur l'antique Alexandrie: Ses fauborgs et environs decouverts, par les fouilles, sondages, nivelléments et autres recherches*, Copenhagen, Kessinger Publishing.
 ・ Toussoun, O. 1934 *Atlas Tārikhī: al-Asfal al-Miṣri (al-Wajh al-Baḥrī)*. al-Qāhira.
 ・ Wilson, P. and D. Grigoropoulos 2012 *The West Nile Delta Regional Survey, Beheira and Kafur el-Sheikh Provinces*, London, Egypt Exploration Society.
 ・ Wizārat al-Thaqāfa wa-Wizārat al-Ittiṣālāt wa-al-Ma'lūmāt 2002 *Mashrū' Niṣām al-Ma'lūmāt al-Jughrāfī: Atlas al-Mawāqī' al-Āthāriya bi-Muḥāfa: at al-Buḥayra* 3, S.C.A., al-Qāhira.

※ 執筆以外に、以下の方々にご協力頂いた(敬称・所属略、順不同)。
 西本真一、菊地敬夫、高橋亮介、深見奈緒子、恵多谷雅弘、堀内則子、阿部佳恵、嶋津智恵、el-Said 'Abbas Zaghoul (Dr.), Gad el-Qady (Dr.), Goma"Abdelmaqsud (Dr.)

1 *Απο δε Σχεδιας αναπλευσιν επι Μεμφιν εν δεξια μεν εισι παμπολλαι κωμαι μεχρι της Μαρειας λημνης, ων εστι και η Χαβριου κωμη καλουμενη*. 「スケディアからメンフィスに向って遡行すると、右側にはマレア湖(マリユート湖)に至るまで多くの村があり、そこにはいわゆるカプリアの村がある。」*Strab.*17.1.23(C803) ストラボンのこの記述は、カノプス支流を船で渡る際にこの研究対象地区の近辺を通過した際に記したものだ(カプリアは現在の Abu Hummus あたりか)、北側に広がる砂丘景観は詳述されていない。
 2 Mahmoud-Bey (Mahmud al-Falaki) が作成したアレクサンドリア周辺の遺跡地図には、低地帯に多くの遺跡分布が記されている (Mahmoud-Bey 1872)。これらの多くは、後世の遺跡調査によって、王朝末期～ヘレニズム時代の遺跡であることが判明している。
 3 同一の砂丘列に所属する近隣遺跡の代表例としては、Kom Aziza がある (Wizārat al-Thaqāfa wa-Wizārat al-Ittiṣālāt wa-al-Ma'lūmāt, 2002)。ここではエジプト隊によって古王国時代とビザンツ時代の遺構・遺物が発見されてる。Kom al-Diba' は、英国隊によれば、北丘陵は王朝末期の時代層を含む可能性もあるが、中心的な年代はプトレマイオス朝後期からローマ時代を推測し、墓地か港施設があった可能性を報じている (Wilson 2012 *op. cit.* 111)。